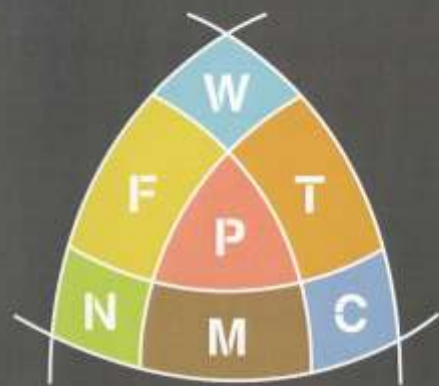




ELF

環境學習課程

ELF 環境学習課程

【ELF: Environment Learning Framework】

本書の著作権と著作権は編著者木村美穂氏を代表として、植物と人々の博物版プロジェクトおよび NPO 法人自然文化財研究会に属します。引用として転写は可となります。但し著作権は木村氏が持っています。内容に関するすべての責任を負います。第2部以降は持続可能な社会を求めて、環境学習の活動や研究の成果を現場で目撃して活躍している環境学習指導者「のびと」が分担して個別学習プログラムを執筆します。

2009年1月24日改定 木村美穂氏

第1部 序論

目次

1. 学ぶことの意味

2. ELF 環境学習プログラム特長とは何か

- 1) 環境の広がりを知る
- 2) 環境学習の範囲 — 初級としての万葉集
- 3) ELF 環境学習プログラムの発展史
- 4) ELF 環境学習プログラムが定まること

3. 個別プログラムの学習目標と内容

- 1) 基本学習プログラム：自然誌 N、文化誌 C、世界誌 W
- 2) 環境学習プログラム：生態 M、自然 T、環境 F
- 3) 総合学習プログラム：環境 F
- 4) 活動プログラム：地域 L、環境 Cp、保全 Cn

4. ELF 環境学習プログラムの活用

- 1) 基本、発展、総合、活動プログラムの流れと関係性
- 2) 新たな多様性と柔軟性

1. 学ぶことの意味

環境教育とは、環境学習を行うことによって自然と文化遺産を継承し、持続可能な社会を創造するために、環境負荷を減らし、多様な自然生活を営めるように、環境保全および資源行動を奨励し、支援する教育方法です。科学的知識と伝統的知恵を習得し、個人的・社会的に持続可能な社会への貢献を形成して、これに基づく生活様式の改革と環境創造を目標としています。

1) 現代

現代の日本における教育制度は、正式には各種の学校、児童館・公民館・博物館、非公式には造学塾・予備校・市民講座関係など、私的には家庭などによって形づくられています。学校教育制度では、主に教員が教育し、生徒や学生が教育されるようになっています。この教育内容の理論的な中心は科学的知識体系です。教育される生徒や学生は教育課程において伝達された科学的知識の数量をたがひが記録され、その成績（点）によって評価序列化されます。この評価によって、達成の序列化された各学校種にさらに振り分けられ、卒業後にはさらに階層化された職業・職種を修めます。階層では成績と社会流動性についての知識の数量と働き振り（勤怠引当）などが評価され、その評価が給料（金）に反映し、社会的地位や暮らしの質の程度が階層化されます。教育する学校や教員は、教育対象者がより高い山を歩める学校、より高い山を登れる会社などにも多数選り込まれるかどうかに、社会的な評価を得、この評価は歴史的にかなり固定的な序列化をすでに受けています。このような学校教育制度は一般論として多くの教育問題を指摘してきています。そこで、学校ばかりに教育を任せるのではなく、地域社会や家庭が教育機能を担い、社会的な平衡を築くために、塾学校（イリイナ 1979）ともいえる任意な学習機会の発展が待たれるようになったのです。

2) 学ぶことの意味

ここではもっとも原初的な意味、学ぶことの意味を原点に戻って考えようとしています。人間が他の生物と異なり、特殊な進化を遂げたのは、狩猟、採集から農耕を生業の基礎に、定住的な集団を形成して、農耕知識と知識の継承を可能とする言葉を発達させ、その結果、生物の進化を超えて文化的進化を始めたからです。それでも制約のうち、子どもは母より見まねて大人のまねをして身体的に学ぶものでしょうが、知識が言語や文字によって体系化されると、順次、系統的に学ぶことができます。さらに、後世時代になって修道院や寺子屋、大学なども社会基盤にでき、蓄積された知識体系が次第に公共にも開放されるようになりました。最近では、学校教育制度が高度に発達して、体系化された科学的知識が私立の学校で伝達され、情報コミュニケーション技術によって新たな知識へと文化的進化を急激に展開しています。

文化的進化においては、まず、資格内系は体系にある知識、自動車、兵器などが人間の運動機能を強化しました。さらに、脳神経系はコンピュータや携帯電話などが記憶と思考機能を強化しました。私たちは期待から始めましたが、その後は算数、計算、図形、電磁、電子計算機、今ではパーソナルコンピュータまでとても複雑な計算を、計算方法やその過程も十分に知らずに、すべてブラックボックスの組み合わせを用いて気楽に行っています。たぶん、子どもの頃に描いた夢の未来以上のことが、特定の分野に限定してですが、科学者でさえ知らないうちに実現しているのではないのでしょうか。

う。とても素晴らしい人類文明の「大傑作」です。

ところが、フィールド調査の機会に、美しいけれども新しい自然環境の中で農耕や牧畜をしながら暮らしている人々に出会い、伝統的な知識の体系が存在することを改めて知ることで、科学者とは違う視点から、こうした現代の人類の文化的進化の側面を考えてみるようになりました。農業の一方で起こっていることは、人類の生物学的進化の後退ではないでしょうか。私たちは生きるために狩猟、採集、漁獲あるいは牧畜をして食糧を得、生きるために学んできました。さらに意識的・無意識的に農耕や牧畜による共生進化を近代以前までは経験させてきました。このように自然との共生的関係を洗練してきたのに、今では科学技術の力に頼って自然を破壊し、商品化し、消費させようとしています。これには、人間という動物種の立場からすると、とても賛同はできません。近代以降の歴史を以てして、道徳的な善悪を定めることの難しさを感じるべきでしょう。本来社会では自分で選択しなくても自動的に行くことができる自動車があるようですが、自分で選択しなくて何が面白いのでしょうか。このような小さい夢よりも、近未来の発展に對する方向を考えるとどう夢を膨らませようかと思えます。

もう一度、私たちヒトが動物であるとの視点から、現代の人類の進化のあり方について考えてみたいと思います。伝統的知識体系を学び直したい、若い人々に伝えたい、生きることの意味、学ぶ楽しさ、必要がここにあると思うようになりました。科学的知識体系と伝統的知識体系の融合をもとめて、10年環境学習プログラムを30年計画で継続して成果に基づいて発展させるのは、ひとえに、生物としての人類を保護とともに人間から考え直してみたいからです。

2. 10年環境学習プログラム特長とは何か

1) 環境の広がりを知る

地球温暖化、熱帯雨林の減少、砂漠化の拡大、生物多様性の喪失、酸性雨、オゾンホール、人口増加、戦争など深刻な地球環境問題、および都市の拡大、農山村の過疎化、大規模生産、消費、廃棄による数多くの地球環境問題が顕在化してきました。近代の産業革命以降の産業社会や都市を見るために、科学的知識体系は学校で伝達されますが、地方で伝統的知識体系は地域社会において体験する機会が少なくなりました。日常、身近に自然環境に接する機会と場所を失い、体系的に身近な環境を学ぶ、また、学ばない個人ないし地域社会が増えました。これらこそが環境問題の文明史的な根源問題と考えられます。

注意深く考えて見ましょう。もうお分かりになりましたように、本来、環境教育は必要がなかったのです。矛盾するようですが、少しでも早く「環境教育」をなくすために環境を学ぶ場と機会を削減したいのです。これらが日常に存在するように、環境教育はもういなくなっているはずですが、この過程が環境問題解決のもっとも有効な方法で、環境保全、環境創造の主要な道徳でもあります。この過程を支える哲学ともいえる環境教育学は新しい学問である環境学の基盤と構築される方法論です。環境学は近代以降の文明の根幹となってきた科学の特性である分析学（還元論）とはまったく異なる特性、すなわち統合学（全体論）志向をしています。現代科学は現象を細部にまで分析、還元する傾向にまで到達しましたが、環境学は全体的に現象間の関係性を捉え出し、環境問題を超越して、新たな統合的領域を提示しようとしています（図1）。したがって、環境教育学は環境を学ぶとは何かを十分な深さまで思考し、人間の文化性、社会性の過程、個人の発達過程において体験学習、教科学習及び非教科学習によって、有能な教育者としての側面を明確に提示する必要があります。

2) 環境学習の範囲 ― 枠組みとしての方策論

環境教育政策の目的は個々の環境問題に対する学習を支援することに加えて、より本格的には文明を支えてきた環境文化を継承、再創造することにあります。1973（昭和48）年のベオグラード宣言以降、環境教育の基本的目標は環境に対する関心、知識、態度、環境保全や教育に対する技能、評価能力および参加とされました。ところが、これまでの環境教育政策は自然体験、野外活動、びみ学習などを個別に学習プログラムとして行う事例が多く、環境学習全体の枠組みの中での個別学習プログラムの位置付け、あるいは相互の連携性を明示してきませんでした。このために現在、生涯学習社会に適合できる環境教育課程の統合的枠組みの構築が求められています。



3) 自然の3つの相とこの世界の要素論

自然には3つの相があります（野田健二、1986）。最初の相は自然、すなわち「自然」、人工化された農山村や都市、「半自然」およびその中の自然観（「真の自然」）です。美しい自然観では豊かな自然の事例が示されています。美しい自然観は道徳的なスピリチュオロジーの自然を伝えるだけです。第2相についての説が本論と第2相への深い関係が第3相の真の自然を語るに際します。

図2は生涯学習の整理によって環境学習プログラムの体系的枠組みをまとめたものです。心算学習コース（1986）の体系による心算表現と方算表現を軸としたイメージから、環境を学ぶための10の環境学習プログラムとその環境教育の目標を統合した作業モデルです。方算表現方式で自然（N）や文化（C）を学び、世界（W）を形成する「基本学習プログラム」、これらをつなぐ生産（P）、消費（T）および消費（F）の「環境学習プログラム」、すべてを統合する道徳（D）の「統合学習プログラム」、さらに地域（L）、協働（C）および保全（Ca）の「行動学習プログラム」によって構成されています。また、環境教育の目標には関心、知識、技能、態度、参加および価値観があります。これらの環境学習プログラムは方算表現と自然との関係性を示す道徳表現の基盤として、相互に関連させ、組み合わせて、柔軟な学習の流れを構成し、適用します。決して固定的な運用にしないように注意をします。環境学習の内面表現はともにも後述であるので、実際に実行される環境学習プログラムの位置づけを明確にしておかないと、環境学習の内容における関心と態度を失います。環境学習は個別に自然現象やプロセスの学習を学ぶのではなく、複数の主題の学習とその関係性を学び、これらを統合的に理解することが前提で、全体学習の基盤はプログラム（P）の学習を確認するためにとても有効です（本稿（1986））。各環境学習プログラムでは、その内容構成が一目でわかるように順意とともに、次の環境学習プログラムの作業モデルを記述として示し、体系的に示すことにしました。

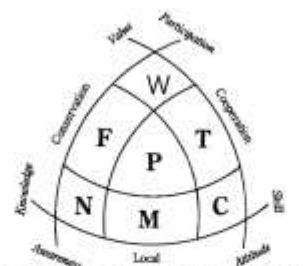


図2. カラダスコップ方式の環境学習プログラムの枠組み
基本学習プログラム：自然観 N、文化観 C、世界観 W
道徳学習プログラム：生産 P、消費 T、価値観 V
統合学習プログラム：道徳 D
行動プログラム：地域、協働、保全の各学習プログラム
環境教育目標：関心、知識、技能、態度、参加、価値観



この生態にわたる環境学習課程を支える学習方法に体験学習、教科学習（科学あるいは分科学）および総合学習（環境学あるいは統合学）の3つがあります。個人は年齢を重ねるにつれて社会参加を拡大していきます。次に前期体験学習から総合学習へと学習内容の割合が変化していきます。学齢期には教科学習が大きな割合を占めます。この作業モデルでは学習方法のバランスを単純化して示しましたが、学齢の前でも、学校を卒業してからでも文明社会に生きていくために生態にわたって学習を続けるのが市民としての個人です。したがって、文明社会は学習の機会を公共的に保障せねばならないと思います。この意味こそを、私は初めて「市民」として提案した環境教育推進法（環境保全のための意識の増進及び環境教育の推進に関する法律）の精神に求めたのです。家庭や地域社会での体験学習の主な内容は身近な自然や伝統的生活文化であり、学校における教科学習では学習指導要領に規定された教科が主な内容を構成します。社会における総合学習とは、人生経験で得たすべての伝統的知恵と科学的知識を総括づけて、文明社会で再発として暮らし、かつ豊かな自己実現を得られるように考え行動することでしょうか（図4）。



環境学習指導者研修は初級レベルにとどまることが多いのですが、それでもすでに30万人超の各種の関連環境指導者が養成されているようです。環境学習は複雑多岐な専門知識と実践的な専門技能が必須ですので、中級レベル以上への知識・技能の向上を図る必要があり、これを支える体系的な学習プログラムの構築が求められています。

これに応じて3段階環境学習プログラムによる統合的な環境学習指導者養成を提案します。自然文化証研究会は環境学習指導者「のびと」の認定を行うとともに、野鳥活動指導者協議会（CONA）に参加していますので、希望者はCONAの指導者認定を行うこともできます。自然文化証研究会は環境研究会を東京大学大学院環境教育実践施設環境生物学研究室、「植物と人々の博物館」および小笠原村のエコミュージアム日本村にわかちあひ講座と協働して開設します。

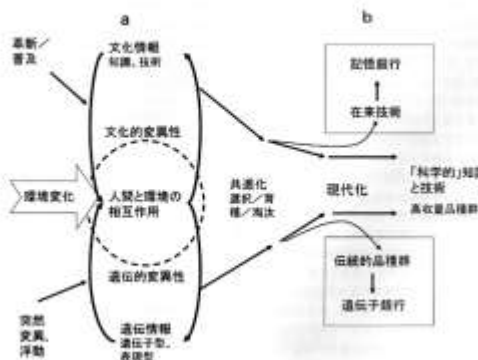
「のびと」は祖父多摩川で生まれ育ち活躍する環境学習指導者の専門職をめざします。ゆたかな自然や文化を村の人々とともに体験学習して、この地域の伝統的知識体系を継承し、都市の人々に伝えることを目指します。私たちは優れたビジネスモデルとして、アメリカ合衆国のワシントン州立公園に似て深い自然の恩恵を受けていますので、その公園運営の歴史を参照しながら、環境学習の場としての新たな国立公園を築いてみたいと考えています。

3. 基本学習プログラムの学習目標と内容

生物文化多様性の拡大と蓄積は人類と生態系との創造、競争、共存、共生など、その関係性の最も重要な連続化過程によって生じてきたと見えます。人間は、捕食されることへの防衛から始まって、自ら捕食する行動や採集行動、これらに対する集積との集合、その習得・継承・共有の手法、基盤意識の伝播過程、植物の栽培化や動物の畜産化、これらの管理・加工・調理などの技術、農山村集落・田舎の形成・保全意識など、順次、環境意識を編みつつも共有の手法を開発し、比較的稳定した人工的生態系、環境文化を構築してきました。しかし、近代以降の科学技術は化石燃料や原子力による膨大なエネルギー供給を可能にし、都市社会を興し、めざましい経済発展を実現し、巨大な都市を造り、際限のない消費を繰り返すようになりました。その一方で、未曾有の環境破壊を起こしながら、人類たった1種 *Homo sapiens* の人口は膨増し2007年8月現在46億を超えて、いろいろな人間関係にもかわらず、なお日々2万人以上ずつ増え続けています。科学技術による交通手段の発達によって世界的に小さくなった地球に、莫大な数の人間が増殖していることが、地球環境問題の根源にあることは間違いない。現代に於けるこれ以上の自然環境には健全なものを求めません。人々による森林の縮小や生物多様性の減少などは歴史に起こっている地球環境問題であることも否定できません。同時に、野生から栽培化・畜産化された生物までの種多様性の急減、いかに見れば生態系サービスの削減は人類が蓄積してきた生物種との豊かな関係性、生物文化多様性をも破壊しています。ここで生物文化多様性を継承するように努力を開始しなければ、近未来の地球社会はその地域固有の特性を失い、文化的にも人種的にも持続不可能になると思います。

種々が蓄積してきた生物文化の豊かさを伝統的知恵の源から環境保全や環境創造、経済的持続発展の開発手法を学ぶことができるのではないかと考えます。文や野・生物学的多様性保全に際する、先住民資源センターの環境ネットワークの役割について論じられる中で、生物多様性は文化多様性と密接な関係があり、欧米から盛ん見られていた先住民の資源が最豊であると見込まれるようになりました（図5）。

地域固有の知恵は全日本一帯の学校教育によって、教えられることがなく、失われてきました。この知恵は農山村のような地域共同体で保存、継承されてきましたが、日本では高齢化が進み、新たな伝承の方法を開発しなければ、近い将来には失われようとする時期にきています。持続可能な社会を構築するための伝統的知恵を農山村エコミュージアムにおける環境学習によって、意識的に学習・継承するようにし、近代産業革命以降の破壊から再び自然との共存、共生関係を復興したいと考えています。伝統的知恵は学校の主要な手帳の一つです。



1) 基本学習プログラム：自然誌N、文化誌C、世界観W

①自然誌 Natural history

今西（1984）は全米自然の重要性を強調し、自然科学の発展を促した自然科学を強調しました。なぜなら、自然科学は部分自然しか見ていないからです。自然の部分を見れば、たとえDNAの塩基配列をすべて明らかにしても、生態現象の豊かさを分けては選んで、自然の3割を認識したことはならないからです。神々の命を授けられたおやの命を、原始生命が生まれ出た後大分は現在でも原始の自然です。限りなく広大であった地球の上で繁栄してきた人類はその数百年の歴史の中で幾多の危機に遭遇してきたと考えられています。これは生物全体の歴史から見ればごく最近の出来事に過ぎませんが、実際に、科学的に認識されている数多くの人類の記録種および野生種は減少し、また消滅していつい。それにもかかわらず、野々の時間感覚と比べると、人類の歴史は大河のごとくゆったりと流れてきたとも思えます（大塚ら、2002、ラングラー、1998）。自然や環境固有の文化を急激に破壊している現代においては、環境学習の基礎科目に保全生物学や環境生物学を添えておくべきでしょう。

今では、日本の多くの科学者が見向きもしなくなった自然誌（見）を学ぶことは排他観を越えることでとても重要です。また、科学では観察という手法もとても大切な基礎ですので、自然を自分の目でじっくりと観察しましょう。これはたいそう道徳心でなくてもできることです。科学的知識体系は科学者がつくり、教師が学校で生徒に伝達するという仕組みになっています（図7）。しかし、事に伝達され、覚えるだけでは面白くありませんので、自分で観察することから新たな発見を待ちましょう。近代以前は誰もが伝統的知識体系づくりに参加していました。これは現代の科学的知識に存在できるものです。

基本学習プログラム 自然誌 Natural history

原初的な自然



左: 神々の座、ヒマラヤ山脈

右: 母なる海、太平洋

未来世代のために人間の福祉を達成し、引き続き福祉を与えるような方法による、天然資源基盤の管理と保全および持続的・制約的決定への方向付けである。土地、水、動植物遺伝資源を保全するよう持続可能な開発は、環境的に持続的、経済的に適切、経済的に実行可能で、社会的に受け入れられる」としています。持続可能な開発には、生態学的・環境的持続性、経済的持続性および社会的持続性の統合的視点など、いくつかの視点がありますが、主要点は未来世代のことも考えて、環境収容力の範囲内で資源を消費し、環境保全をすることです。農業体系は持続する入口を食料生産によってまかなない。かつ、世界の環境を保全するものでもありますが、より広い視野を採り、未来の食料の安全保障を確保するものにせねばなりません (Gibson et al. 1995)。

食料安全保障のために食料生産を高めることは重要ですが、膨大な人口に対して単に量的に食料を充たせばよいということではありません。質的にも安全が保障されなければならないと思います。グローバル化の波の中で、国際的に巨大なアグリビジネスが動き、世界中で小規模農業を圧迫させています。昨今、基肥農薬、過剰灌漑、抗生（牛海産物由来）、トランス脂肪酸など食物の汚染、食品表示の偽造、あるいは遺伝子組み換え作物の安全性への疑問、特定農産物の偽造、伝統的育種と在来品種に属する伝統的育種の保護など、多くの課題が指摘されています。一方で、前述したような市場経済に恵られない自給自足、自給自足、有機農業や自然栽培の野外環境下農業など代替農業体系のさらなる持続可能性を求める研究が望まれます (Hirotsu 2004)。

② 思考 Thinking

人間は考えることで輸入である。生まれてから死ぬまで一生を通じて、人間は環境を学び、考え、暮らしていきます。このため人間の発達段階を中心に発達心理学を学ぶことはとても有効です。

発達心理学においては先に述べたように、3つの学習方法、体験学習、教科学習および総合学習がバランスよく必要です。単に詰め込んだだけの知識は、世界観として受け入れられません。広い世界の歴史地理の上で、人生を歩いていくには、何にどちらに向かうかの判断が重要です。将来を決める判断は膨大な情報から答えを1つ選ぶことです。先人の経験や考えをままとめたものが歴史です。優れた本をじっくり読めば、会うことができない遠い過去の人間から教えられることができます。子どもたちに成長の中で政治経済の事柄を語り聞かせると、子どもたちなりに深く思考して、育ちの環境が心に沁み入ります。

議論は世間の1方法で、暗喩ではありません。新しい考えや見解を聞き、反論し、さらに新しい考え方を生み出し、思考を深めることです。議論によって参加者の考えが変わることは前提です。持論の断片や平行線が残りようではよい議論ではありません。議論のトレーニングをしましょう。たとえ熟練でも、自分の論で考えて、納得した行動をするべきです。実勢に逆らうのは得意ではありませんが、民主主義は少数意見を尊重することが前提ですから、自分が正しいと考えたことは発言したいと思います。結局に、正直に議論をしたいです。自派に賛成を持って防衛しつつ、議論では保護も、保護も、受け入れも柔軟にありたいと思います。

③ 感情 Feeling

美しく平安な自然、田舎、町並みや動物園の中に入ると、心癒される時、生きていることに感謝する時があります。美しく美しい自然、ヒマラヤの山々に到着すると、神々の前に参拝するようになります。知る光景の記憶で心を癒す時、まるで生まれ変わるような時もあります。地方で、何れは自然の中で、新たに生きる力を受け取り、再生を望むことも、何れは動物園や動物園に訪れることもあります。

自然は直観に訴えかけます。均質な自然の美しさは人々の美しさに訴えかけるものでしょう。自然や動物は言うに及ばず、思考にすら多大なインスピレーションを与えてくれる。生物学的感覚的感性による直観的な受け取り、海の底、山の頂、花の匂い、果物の味、木々の匂い、いわゆる五感を大切にする。日々の暮らしは美しく、ゆったりと流れるようになります (図13)。

3) 統合学習プログラム：遊戯 P・Play integrated program

周知人類は遊びに生きる時間も多くを費やしてきました。著名 Ikono・Johno と呼ばれるのはこのためです。遊びは生きるうえで大きな意味を持っています。遊戯学習のすべてがここに統合できると考えられています。感じ、考え、作ることをすべてを統合してドラマのような芸術が生まれます。いつか夢の中で、脚本から上演までのプログラムを展開したいと願っています。伝統的で誇りに感じられるお祭りと遊戯などは遊びを盛り込んだプログラムで、地域ごとに展開し続けたいと思います。

4) 活動プログラム：地域 L、活動 C、安全 G

① 地域 Local activity

環境とは何の概念ですか。環境学習の場に関する学習は常に必要です。子どもから学習までが環境を構成していても、私たちが日常的に意識しているのは、自分の体から社会や地域社会までです。しかし、現代の文明の源の文化においてには生態系や地球環境の理解と意識を改めて環境問題は解決できません。最も生活に近い場所を学ぶことから始めるのは必然的なことです。家庭、地域社会、学校、会社などが日々の暮らしの場所でしょうか。自然と歴史の学習が重要でしょう。次に、暮らしを支えている水、食糧、森林、エネルギーを提供している地域の理解が必要です。ここまでは都市圏内から、さらに国際的に広がります。

地球環境問題が深刻な状況といえ、温暖化ガスの二酸化炭素の削減のためにレジリエンス（回復力）ではあっても頼りたがりであり、地球環境とどのようなつながりがあるのかとでも理解したいと思います。環境問題はとても複雑な事象ですので、多くの人々や団体、企業、国、国際機関などが関わっています。とても大きな問題ですから個人ではどうにも対応してよいものなのか、正確で十分な情報もなく考えることさえ困難ですので、身近なことやできることをしましょうということになります。したがって、大学や研究機関、自治体や国は協力できる有効な方法を提示すべきでしょう。ユネスコ・プログラムはともにも有効な地域理解のための活動概念です（リビエール 1973）。エコ・プログラムづくりの活動は地域で展開して自然や文化の保全を図るというように活動プログラムのすべてを統合することになります。

連関学習プログラム 思考 Thinking、感情 Feeling



上：焚き火を囲んでの語り

新：風管を感じるゲーム
統合学習プログラム
Play

下：木に一体化する



③ WSの企画マネジメント（施設管理）

○WSとは何か（WSの種類や位置、効果など）

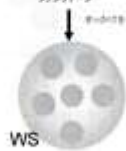
○ファシリテーション（ファシリテーションとは、伊との違い、ファシリテーターに求められるスキル）

○WSの企画と運営知識（どうやって企画し組み立てるのか、どのように運営を実施していくのか）

ワークショップとは

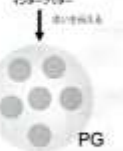


WS



参加者が話し合えて学ぶ・問題解決

PG



事前プログラムを通して学ぶ・感じる

④企画立案実践

○NPOでのオリジナル企画立案実践

現在それぞれの研修生が抱えている企画を研修の内容を反映させ企画立案。企画概要までのタスクティになるまでのものに作る。講師が途中見回りながら、企画らしくなるようにサジェスションする。

※タイムテーブル

■導入（10分）

講師自己紹介（5分）

本日の研修の目的説明（5分）

・プロジェクトやイベント、プログラムの企画運営知識の習得や運営管理。

・WSの企画運営知識や運営管理

・講義形式ではなく、WS形式で進行

課題を出して、それに対する個人の問題や知りたいたいことを聞き出し、それに対応するやり方で進行。

自分もわからない場合はディスカッションに参画。



企画概要の構成

- ・タイトル
- ・趣旨、目的
- ・実施日時
- ・実施場所
- ・参加対象（募集人数）
- ・参加費
- ・実施団体
- ・活動内容（時系列で）

企画書の構成

- 基本計画
 - ・表紙
 - ・はじめに
 - ・企画概要
 - ・社会的背景
 - ・基本的な考え方
 - ・コンセプトマップ（一覧）
- 実施計画
 - ・実施内容概要（一覧）
 - ・各企画詳細（数ページ）
 - ・広報計画
 - ・運営計画（スタッフの役割）
 - ・スケジュール（当日までの）
 - ・予算

■展開（10分）

WSの趣旨の説明（5分）＜みんなの関心ポイントがあるかも＞
こちらが用意した企画運営のテーマについて、知りたいたいことや、質問、疑問点などを付箋紙に1人1〜3枚くらい書いてもらい発表してもらい、みんなでそれらを共有し、講師が重要なポイントや特長を形式で進行する。

企画運営マネジメント（6分）

●イメージ抽出（5分）

テーマ1：「企画運営と聞いて」どう思いますか？

テーマ2：「WSとは何か」とどんな企画？ 5分 目的が伝わる。

テーマ3：「企画立案上で課題」だと思ふことは？

テーマ4：「企画運営する上で課題」だと思ふことは？

●イメージ共有・解説（6分）

テーマ1：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：管理（マネジメント）、経験、考える、想像（シミュレート）→マニュアル、評価、気づき

テーマ2：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：共通、ニーズ、面白さ（楽しさ）、わかりやすさ、あみだりでない、自分、価値観と価値観 一以上がコンセプトにつながる

テーマ3：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：人、時間、予算、コンセプト、企画書、企画概要、資料、リアル化、思いをカタチに

テーマ4：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：人、時間、予算、コンセプト、情報共有、マネジメント力、情報力、想像力（シミュレート）

休憩（10分）

WSの企画立案について（5分）

イメージ抽出（10分）

テーマ1：「WSとはどういうもの」だと思ひますか？

テーマ2：「企画立案上で課題」だと思ふことは？

テーマ3：「展開する上で課題」だと思ふことは？

●イメージ共有・解説（4分）

テーマ1：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：PT、協同作業、情報収集、意思決定、自ら何を学ぶのか（自学）、生ものWS、エスWS、演習WS、企業WS、WSWS
品して、つくって、まらして、ふりがえる

テーマ2：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：ニーズ、自分、問題意識、思いをテーマに、想像（シミュレート）

テーマ3：共有化（8分）→解説（7分）

keyword：その場で起こっていること（実況中継）、まろ、認める、情報する、関心な情報取り、予定満杯、時間短縮、WSでの議論をまとめる

休憩（5分）

NPOでのオリジナル企画立案の実践（6分）

・西条を通じての年度別プログラム企画（プロジェクト企画）

・1日単位のプログラム企画

の、どちらかを選択し、小冊子で実施できるもの、対象者は問わず、明確な目標、趣旨にヒアリング。

企画概要シートに記入、出来たら見せてもらう→印刷
完成したらからプレゼン資料づくりへ

最後の15分は30分使ったプレゼン資料づくりを促す。

1枚はタイトル、2枚目はコンセプトテーマ、3枚目は簡単な内容

■企画プレゼンテーション（15分）

場を盛り上げる、1人2分前後、コメントを入れる。

■まとめ（5分）

いろいろやってきたが、理論的に学んでも結局最後は、経験、経験がモノをいう。「思ひをカタチに」、「思ひに描いた図」ばかりを食べてもしょうがない。足跡、現場で今後とも経験を積み上げていってほしい。トライ＆エラー、どうにかする、役割を担ってほしい。決断をする→次週に立つ覚悟を持つこと。
企画書はいつもそれと併せて作る。

企画を立てるというものはそういうものだと思う。

（引く下書き）



